

地域を守り、 淀川水系に貢献

だ い ど が わ 大戸川ダム

大戸川ダム建設事業・事業概要

Daidogawa Dam Construction Project

AIDOGAWA DAM

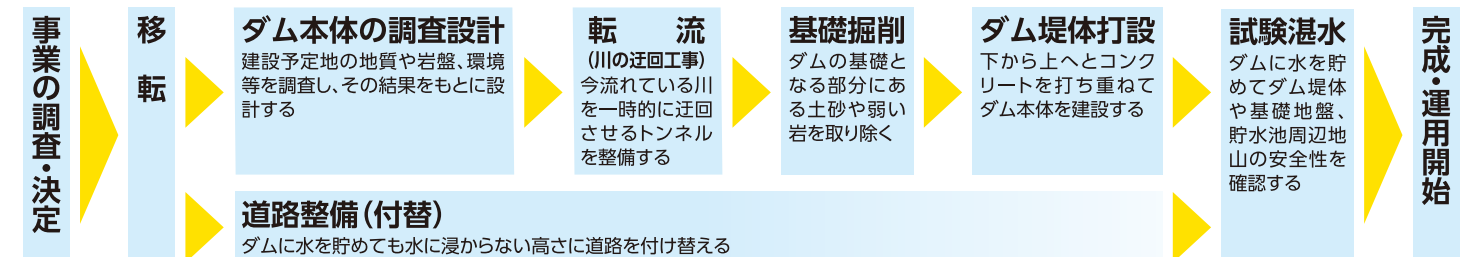
国土交通省 近畿地方整備局
大戸川ダム工事事務所



早期の完成・治水効果の発現に向け、 事業を進めています。

大戸川ダム建設事業の進め方

大戸川ダムでは湛水地域の方々の移転は終了し、付替道路(大津信楽線)は開通しました。



大戸川ダム周辺地域の豊かな自然・文化・歴史

豊かな自然に囲まれた大戸川流域には、独自の文化・歴史が息づいています。大戸川ダムでは、これらの地域資源も活かしながらダム周辺地域の活性化に取り組んでいく予定です。



国土交通省 近畿地方整備局 大戸川ダム工事事務所
〒520-2144 滋賀県大津市大萱1-19-32 TEL.077-545-5675 FAX.077-543-5340

事務所webサイト
<https://www.kkr.mlit.go.jp/daido/>

大戸川ダム 検索

X(旧Twitter) @daidogawadam

このパンフレットは、当事務所での職場体験やインターンに参加いただいた皆さまのご意見を参考に作成しています。
*田上中学校職場体験：北村 怜さん、木村 風乃亮さん、福岡 愛斗さん *インターンシップ(就業体験実習)：古辻 俊樹さん、小西 優輝さん



地域を守り、淀川水系に貢献する「大戸川 ダム」は、洪水調節専用の流水型ダムです

琵琶湖から流れ出る唯一の河川である瀬田川。
その支川である大戸川で洪水調節専用の流水型ダム「大戸川ダム」の建設事業が進んでいます。
大戸川ダムが建設されることで、大戸川沿川の洪水被害が軽減されるだけでなく、
淀川本川筋で唯一のダムである「天ヶ瀬ダム」と一体的に運用することで、
宇治川・淀川に対しても効果が発現し、
下流に位置する京都や大阪を洪水被害から守る大きな役割を担っています。

氾濫を繰り返す大戸川～「水七合に砂三合」

大戸川は、滋賀県の信楽山地（三重県との県境付近）にある高旗山（709.8m）を水源とし、甲賀市（旧信楽町）、大津市南部を流下して瀬田川に合流する、流路延長38km、流域面積約190km²の一級河川です。

大戸川周辺の山々では、藤原京や平城京の造営、東大寺などの南都七大寺の建立のための用材や燃料などとして木々が伐採されてきたことで山肌が荒れ、大雨のたびに大量の土砂が川へと流れ込みました。大戸川の流れは「水七合に砂三合」と言われるようになり、川底には土砂が堆積して氾濫が繰り返されました。

明治時代からは、近代的な砂防工事を実施してきましたが、氾濫はなくなっていません。



大戸川ダムの諸元

位置（左岸）：滋賀県大津市上田上牧町
（右岸）：滋賀県大津市上田上桐生町

ダム型式：重力式コンクリートダム

堤高：約67.5m

堤頂長：約183.2m

洪水調節容量：約21,900千m³

事業区域：大津市、栗東市、甲賀市

EL. 249.20m サーチャージ水位

流水型ダム

67.5m

洪水調節容量 約21,900千m³

EL. 185.00m 基礎標高

みおといいます。よろしくね!

ボクはダイヤモンドだよ。

みお

ダイヤモンド

大戸川ダム公式マスコットキャラクター

3次元モデルによる完成イメージ
概略設計完了時点版

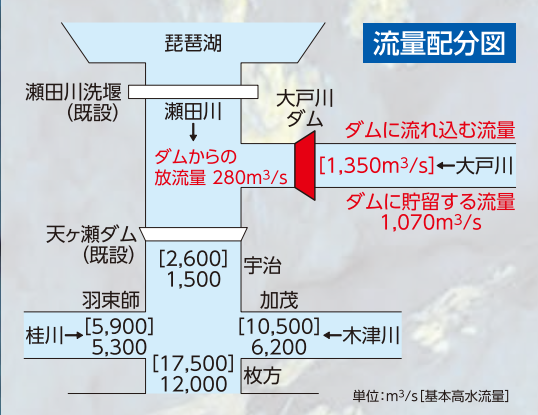
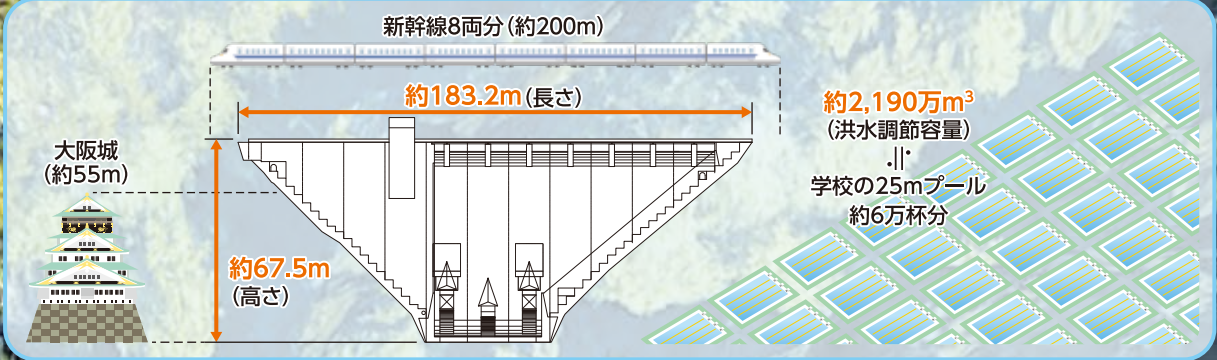
大戸川ダムの3つの効果

- ① 大戸川下流域の洪水被害の軽減
瀬田川に合流する大戸川の下流域を洪水から守ります。
さらに、天ヶ瀬ダムと一体的に運用することで、
- ② 宇治川流域の洪水被害の軽減
「平等院」などの世界遺産もある宇治川流域を洪水から守ります。
- ③ 淀川下流域の洪水被害の軽減
首都圏に次ぐ大都市圏である淀川下流域を洪水から守ります。

大戸川ダム建設の経緯

事業計画と事業着手	
昭和43(1968)年	予備調査着手
昭和53(1978)年 4月	実施計画調査着手
平成 元(1989)年 5月	建設事業採択(多目的ダム)
平成 4(1992)年10月	工事用道路着手
平成 6(1994)年10月	損失補償基準協定書の締結
平成10(1998)年 3月	事業区域内(大鳥居・桐生辻・黄瀬)の家屋移転が完了
平成11(1999)年 6月	付替県道大津信楽線着手
平成13(2001)年 7月	水源地域対策特別措置法に基づく水源地域整備計画決定
計画変更	
平成21(2009)年 3月	淀川水系河川整備計画策定 → 利水全量撤退を踏まえ、洪水調節専用ダムに計画変更、ダム本体工事については実施時期を検討
12月	ダム事業の検証にかかる検討を開始
平成28(2016)年 8月	ダム事業の検証における対応方針決定
事業再開	
令和 3(2021)年 8月	淀川水系河川整備計画変更 → 必要な調査等を行ったうえで本体工事を実施すると位置づけ
令和 5(2023)年 3月	付替県道大津信楽線完成

大戸川ダム図鑑



大戸川ダムは平常時は水を貯めない流水型ダム

ふだんはダム湖がないの？

【平常時】
平常時は現在の川の流れや様子は変わりません。
ゲートからこれまで通り流れます

洪水時だけダム湖が出現するんだ

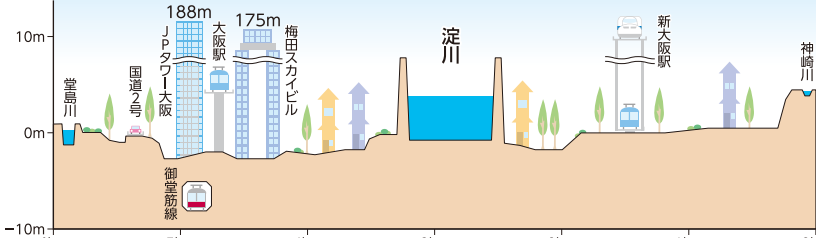
【洪水時】
洪水時にゲートを調整し、上流側に水を貯め、洪水後に下流が安全になってから貯めた水を放流します。
ゲートで下流への流量を調整します

※ダムの形やゲートの配置などは、今後の検討によりダムの形状等は変更する場合があります。

淀川下流域(大阪府域)には人口や社会インフラが集中しています。ひとたび洪水が起きると、人的被害の拡大や都市機能の麻痺が予想され、その影響は全国に波及すると言われています。



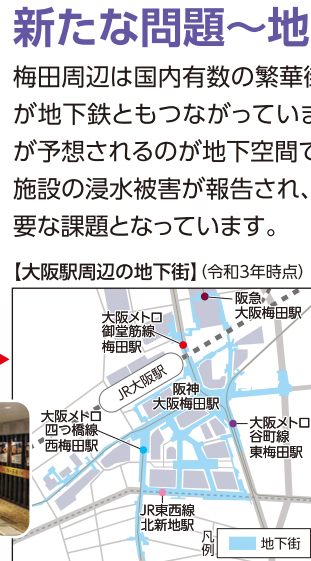
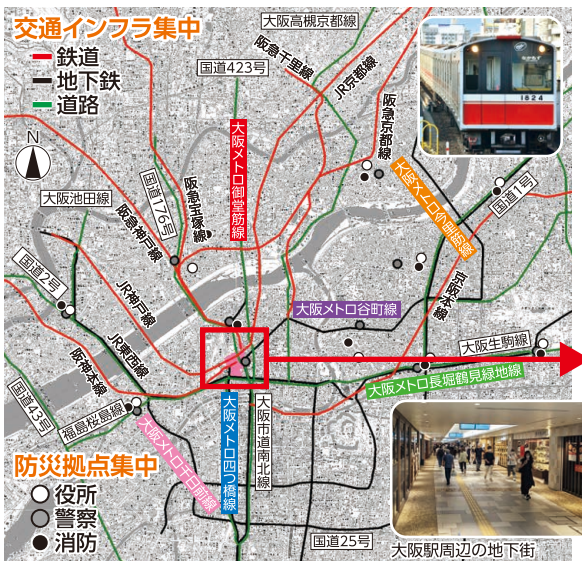
【大阪駅周辺の断面図】(イメージ)



**淀川の高い堤防で
守られる大阪平野**

大阪平野は海拔ゼロメートル地帯で、淀川の高い堤防で都市が守られています。淀川周辺には行政機関や交通インフラが集中し、JR大阪駅はわずか10km程度しか離れていません。

梅田周辺は国内有数の繁華街で、延べ面積約15haの地下街が地下鉄ともつながっています。水災害時、最も深刻な被害が予想されるのが地下空間です。近年、九州や関東では、地下施設の浸水被害が報告され、地下空間における都市水害が重要な課題となっています。



大阪駅周辺は交通インフラが集積し、地下空間が広がっています。淀川下流域の洪水調節を行う最後の砦である天ヶ瀬ダムが大戸川ダムとの一体的運用で洪水調節を負担することで、淀川下流域の洪水被害から守ることに繋がります。

大きな災害を未然に防ぎ、淀川流域の暮らしを守るために、宇治川・木津川・桂川の合流点より上流に9基のダム・堰が配置され、各支川の洪水調節を行っています。刻一刻と変化する河川の状況を見極め、本川や支川の水位のバランスを図りながら、すべての治水施設の総力をもって流域の安全を守っています。



上流でダムたちが頑張ってるのね

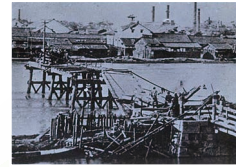
だから
下流は安心して暮らせるのだ

淀川は、琵琶湖から流れ出る唯一の河川である瀬田川が京都に入ると宇治川と名前を変え、その後、木津川、桂川と合流して淀川となり、大阪湾へ注ぐ一級河川です。

淀川水系は大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、三重の2府4県にまたがり、流域面積は8,240km²にもおよび、流域には1,248万人^{*}が暮らし、大阪や京都といった大都市を擁し、国内でも首都圏につぐ経済圏を誇り、長く歴史・文化の中心地として繁栄を続けています。

「大戸川ダム」は、淀川水系の本川筋で唯一のダムである「天ヶ瀬ダム」と一体的に運用することで、下流に位置する京都や大阪を洪水被害から守る大きな役割を担っています。

淀川は過去に何度も氾濫を起こし、流域に大きな洪水被害をもたらし、その度に多くの人が犠牲となりました。淀川では明治18(1885)年の洪水を契機に制定された河川法に基づく近代的な治水事業に着手し、新淀川の開削と三川合流点の付替へ、琵琶湖の出口にある瀬田川洗堰(南郷洗堰)の建設など、大規模な事業が進められました。しかしその後も大雨や台風が頻りに淀川には氾濫し、洪水の度に川川整備の在り方が見直されてきました。



明治18年の大洪水
大阪市内の大半が浸水。近代治
事の先駆けとなる淀川改良工事
まり、現在の淀川が形づくられた。



大正6年の大洪水
高槻市大塚の堤防が決壊。流域全体でも多くの場所で堤防が壊れ、浸水。家屋、死傷者が多数にのぼった。



昭和28年台風13号
宇治川左岸向島地点が
決壊。水系全体の根本的
な治水対策が必要とな
り、天ヶ瀬ダムを含めた
ダム群の計画・整備を進
めるきっかけとなった。



天ヶ瀬ダムと一体的に運用することで、「平等院」などの世界遺産もある宇治川流域を洪水から守ります。

大戸川ダムは天ヶ瀬ダムの流域（瀬田川洗堰上流を除く）の負担を補うもので、天ヶ瀬ダムの負担軽減により、洪水調節機能を最大限活用し、宇治川と淀川の安全性向上に大きく寄与します。



【現在の天ヶ瀬ダムの集水面積】



古くから森林伐採で山肌が荒れ、度々
氾濫を繰り返している大戸川。明治時
代から治山対策事業を講じてきまし
たが、支流が流入する下流域などで
は、浸水被害が後を絶たない現状を
抱えています。



昭和57年台風10号の被害
石居橋の流出



昭和28年台風13号洪水
はより
河原町下流(牛沖町)より

近年で最大の水害となった平成25(2013)年台風18号と同様の降雨を想定すると、大戸川ダムが整備されていた場合、ダムの下流地域で約1.4m水位を低下させる効果があり、浸水被害を大きく減少させることができたと推定されています。

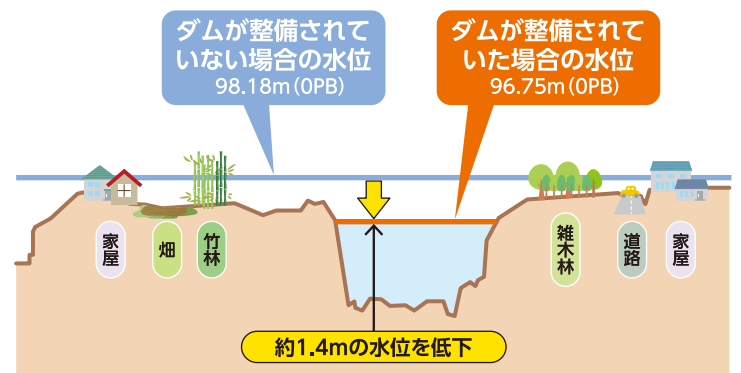
【平成25年台風18号における越水による浸水範囲(実績)】



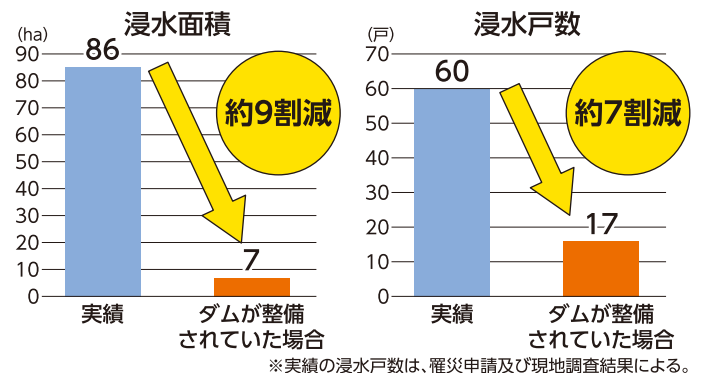
【大戸川ダムが整備された場合の浸水範囲の想定】



【大戸川ダムが整備された場合の水位低下効果】(堂村橋付近)



【大戸川ダムが整備された場合の越水による浸水面積・浸水戸数の想定】



ダム建設に伴い、湛水地域となる大津市上田上大鳥居町、上田上桐生町、甲賀市信楽町真瀬の55世帯210人の方々が先祖伝来の住み慣れた土地を後にされた。このうち、上田上大鳥居町は集落全体での移転となり、平成9(1997)年、新たに開かれた「大津市大鳥居」への移転が完了しました。

「ふるさと記念館収蔵庫」では、「消えゆくふるさとをに残したい」と地元的女性が解体前の全53戸を一軒ずつ描いた水墨画など、ありし日の大鳥居の歴史を垣間見ることができず。

【大鳥居地区の集団移転】



【ふるさと記念大鳥居収蔵庫】

